

月刊

いじろのとも

第七卷

八月号

大日如来の自己顕現

過去となりたる

この世で起こつた

すべてのことが

子どもが自己を客観的に

大日如来の

自己顕現

それは法なり

他己をなす元

これから起こる

未来のことは

自己の生き方

示すものなり

信仰とは

山の上まで

登ろうとする人は

登つた人の

言うことを信じ

仰ぎ見て

それに従つて

生きよ

名利をのぞむ

自らを

何ともできぬ

人こそが

外の世界の

名利を望む

人生を考え直して

みたい人は(三二二)

『聖書』解説(八)

マタイ福音書の第五章を続けます。

一 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。

一 一 わたしのために、のしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。

一 二 喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいだから。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。

最初の十節は、四月号で述べましたように、「くする人は幸いです。その人はくだからです。」という、一連の構造をもつ、最後の文です。四月号で、ぜひ、ご確認下さい。そして、解説も同時に読み返してみたいと思います。

人は、刻々と変わって行っています。例えば、肉体で考えてみましても、太ったりやせたり、かぜを引いたり治ったり、疲れたり回復したり、調子が良かったり悪かったり、年齢だと感じたりまだ若いと思ったり、よく眠れたり眠れなかつたり、食事がおいしかったりまずかつたり、常に変動しているのです。ここも同様です。自分では自分は一貫していると思っているかも知れませんが、人に対する態度も、考え方や感じ方も常に変動しているのです。ですから、何度も、何度も、読み返して頂きたいのです。読むたびに何か違った感じ方ができるはずです。そして、行間までも理解できるようになって行くのではないのでしょうか。

さて、本文の解説に移ります。まず、「義のために迫害されている」の「義」ですが、この意味も四月号で述べました。復習しておきますと、義には神の義と神の前の人の義とがあり、神の義は、神が完全さの標準に照らしてみて適合する、つまり神が完全無欠である、ということですし、また、神の前の人の義とは、この絶対な神を畏敬し、神の愛を信じ、神と同じように人を愛し、許すということです。

こうした意味をもつ、「義のために迫害されている者は幸いです」とは、どういうことなのでしょうか。

ふつう、迫害されていない者は幸いです、というのならよく分かるのですが、迫害されている者が幸いとは、常識では、とても分かりません。だって、迫害は辛いもの、いやなものだからです。

なのに義のために迫害されている者は幸いなのです。なぜなのか。それは、一口で言いますと、迫害されても神の正しさを実践するほどに、自己を捨て、神を信じ、神と同じように人を愛し、許すことが出来る人は、続いて出てきますように「天の御国はその人のものだから」だということなのです。

同語反復のように聞こえるかも知れませんが、そうではありません。

どこまでも神を信じ、キリストを信じ、キリストの言われることを、毫（ごう）も疑わず、ひたすら実践するとき、他者のために生きることのみが、自分の生き甲斐となるようになってくるのです。義のみがその人の生き方となるのです。また、逆にそうなりますと、迫害などものともすることは無いのです。さらに、そうなるとき、迫害は必ずあるものでもあるのです。実は、こうなるということは、自己への執着を完全に捨てるということなのです。自己を完全に客観的に見ることができるということです。でも、これは極めて難しいことと言えます。

では、自己を完全に客観的に見るとはどういうことなのでしょう。ご理解して頂くために、少し難しい話になって恐縮ですが、私の「自己・他己双対理論」で検討してみたいと思います。

この理論では、他己は「過去」なのです。それは、自分を含めて人が為してきたことです。あるいはもつと拡大しますと、この世で出現し、現象していること全てが自分にとっては他己をなすものと言えるのです。つまり、客観の世界を構成していること全てがそうなのです。ですから、自分が為したことも、自分への執らわれを離れば、客観に属することだと言えるのです。

でも、自分が為したことを、自分を離れて客観的にみることとは極めて難しいことです。もし、為したことが悪いことだと、大抵は為したことを、いつまでもくよくよと思いつらい、為したことを隠そうとしたり、合理化したりします。また、善いことだと、それを人に吹聴し、誇り、自慢し、驕慢（きょうまん）になつて行きます。それは自己への執らわれがあるからだと言えます。

悪い方の例をあげますと、例えば、深夜、自動車を運転していて、人身事故を起こしたような場合、多くは一瞬逃げようかどうかでしょうか、つまり、ひき逃げをしようかどうか迷うかも知れません。でも、もし自分がその事

故の目撃者であれば、迷わず、すぐ駆け寄って被害者を病院へ運ぶ手配をすることだと思つたのです。

自分が為したことでなく、他者の為したことでと、大抵の人が、正しい処置を取ることができのです。でも、自分が事故の当事者になりますと、自分を客観的に見ることが難しくなり、自分の為した過失に執らわれて、過ちをさらに重ねることになりやすいのです。

分かりやすくするために、極端な例と思われるひき逃げ事故を取り上げましたが、でも、このことは、日常の全てのことに当てはまるのです。自分のなしたことは、なした途端に自分を離れて客観的事実となっているのです。こうした例によって、自己にとつて客観的とはどうということなのか、そのことに気付いて頂いて、自己への執着を捨てるきっかけになればと思つたのです。

こうみてきますと、「自己」が自由にできる可能性があるのは、これから起こること、つまり「未来」なのです。そのために自分の為したことを含めて過去が規制となったり、参考となったり、支えとなったりするのです。大切なことは、「過去」をくよくよ思い煩うことではなくて、自分の為したことも、客観的事実として自分に引受け、それを未来に生かしていくことなのです。それが、「いま、ここ」を「現在」として積極的に生きていくと

いうことなのです。

たとえ迫害にあおうとも、自分への執らわれを捨てて、他者のためにどこまでも義を重んじ、信念を変えることなく、キリストの教えを実践するとき、その実践は人々の他己となり、法となつて、人々を支え、この世に神の御国が実現するのを早めることになるのです。しかし、真にそれができるのは、自分の中に「天の御国を実現した人」のみであることを忘れてはなりません。

これまでのどの聖書の解説書を見ましても、天の御国はあの世、来世のこととされています。昔のように、人々の神や人を信じる力が横溢（おういつ）し、人間としての器量が上等であつた時代は、キリストのような自分を超えた人の言うことを信じ、あの世を信じ、あの世の幸せを信じることで救われたかも知れませんが、現在のように科学万能、理性万能で、それを超えたものを信じるのができない時代では、あの世で幸せになれるから、現世での不幸せを辛抱せよ、と言つても説得力がありません。現世でこそ、真の幸せが実現できるというのであればならないと思つたのです。

しかし、その世界は、科学も理性（理屈）も、物も生命も超えたところにあります。何がなくても、幸せな世界なのです。老子で言えば、「為すことなくして、為さ

ざることなし」を実感する世界です。この「為す」に、見る、聞く、読む、識（し）る、など、どんな動詞を入れても成り立つことを実感する世界だと言えます。

キリスト教も、天の御国をあの世とするのではなく、こういう現世における全てを超えた世界を目指さないかぎり、キリストが説いたような真の宗教となることにはきません。

キリストは当時の人たちの器量や傾向、風潮、信仰などに応じて、方便としていろいろ説いています。ですから、言葉に執らわれることは必ずしも正しいことではないのです。また、聖書自体も正確にキリストが言った言葉ではありません。大切なことは、キリストの「真意」を理解することなのです。でも、問題なのは、キリストと同じ境地に達しない人が、キリストの真意を理解することはとても難しいということです。例えば、キリスト教を布教し、定着させたパウロでさえも、あのような浅薄で常識的な理解しかできないのです。日本のこれまでの著名なキリスト者たちも同様です。古本屋に行く度に、キリスト教や聖書の解説書を買ってきては読みますが、不幸にして未だ真の理解者に出会いません。どれもが、常識的、卑俗で、言葉を弄するだけに終わっています。

さて、残りの十一節と十二節ですが、十節とほとんど

同様のことを述べています。つまり、迫害されるものは幸いだということですが。ただ、違うところは、より具体的に述べている点です。つまり、迫害として、ののしられたり、ありもしないことで悪口雑言を言われたりすることをあげ、幸いとしては、喜びおどるべきこと、天での報いが大きいことをあげています。また、これまでの預言者も、同様に迫害を受けたことをあげています。

キリスト以後にも、多くのキリスト教布教者や信者が迫害を受けたことは歴史に記された通りですが、ここで、一つ注意しなければならぬのは、迫害を受ける者は、天での報いが大きいという点です。

前述の通り、これまでのキリスト者はこの解釈を来世において天国で報われると述べていますが、これはあまりにも自分に執らわれたものだと言えます。再度、補足して言いますと、この解釈では、この世で自分が迫害を受けた報酬を、あの世に自分が生まれ変わった時、自分が神より受け取る、と考えるようですが、私は、天の摂理はこの世で行われており、天の報いはこの世で、自分もそうかも知れませんが、自分以外の人が受けると考えます。つまり、神を自分の中に見いだした、そうした人の行為は神の御国がこの世で実現するのに、大いに報われますし、自分もそれに強い満足を感じると考えるのです。

自作詩短歌等選

絶対を宿す

絶対を
みんなここに
宿しおり
その絶対が
われわれの
社会となりて
現れる
人のこころを
感じるは
この故なるぞ
障害を
もちて生まれし
人たちが
それをこの世に
示しおりける

他律がいる

他律なき
自律をめざす
今の世は
傲慢なこと
気付きもせず

行いを誤る

他己の弱い人は
意識が自己に
集中して
すぐ
行いを誤る

坊主は聖職？

坊主は
人の心が
もつとも
分かなければ
ならない職業
なのに

淋しさいやす

老人の
一人ぐらしの
淋しさも
般若心経で
いやされていく
大切に
するもの

人の心を
もつとも
無視することが
できる職業

宗教は
自然と命を
大切に
する

そして
それに甘んじる
人の
多い職業

でも
もつと大切に
するものがある
それは
人

自作随筆選

オヤジ狩り

八月四日（日）、NHK総合テレビ、朝九時から一時間、日曜討論という番組が「なぜ？ 大人を襲う少年たち 多発・集団強盗事件 いま十代の心は」と題して放送されました。

最近、大人の男性が夜一人歩いている、集団をなした少年たちに襲われ、暴力でお金を奪われる事件が多発しているそうです。これを少年たちは「オヤジ狩り」と呼ぶそうですが、その襲撃はかなり計画的だと言います。また、彼らにはたいした罪悪感もたず、ゲーム感覚でやるようです。逮捕されたとき、強盗傷害罪という重い罪になると告げられてはじめて、したことの重大さに気付くと言います。

番組では、こうした事件について、司会者のほか、若者の非行や文化に詳しい四人の討論者が、なぜこうした事件が起きるのか、いま少年たちの心のあり方はどうなっているのか、こうした事件をなくするにはどうしたらよいのか、などについて話し合いが行われていました。

今の少年たちの心理的な傾向について、次のような指

死が時を刻む

死が
音もなく
刻々と
時を刻む
この一生

真の自律は他律

真の自律は
他律
他に律せられること
その時だけ
真の自由がある

愚者の集まり

砂浜の
真砂なるほど
愚者いるも
賢者一人に
かなうすべなし

三人寄れば
文殊の智慧と
民主主義
愚者が集まり
賢者裁きぬ

摘がありました。それらは、少年たちに規範性が薄くなってきたこと、悪いかどうか判断できない、あるいは判断しなくなってきたこと、被害者の痛みが分からなくなってきたこと、少年たちがお金に全ての価値をおくようになってきたこと、世間に少年たちが見習う見本がなくなってきたこと、彼らは多重人格的で、生活をバーチャル・リアリティ（仮想現実）と捉えていること、などでした。

また、なぜそうなったのかについては、一つは心理学者に責任があるということですが、欲求不満にさせない育て方の流行にある、とされています。その結果か、彼らは、親をコミュニケーション・チャンネルの多くの選択肢の中の一つのに過ぎないと考えていると指摘していました。

防止策としては、次のことが話し合われていました。つまり、大人がモデルを示すこと、何が悪いのか善いのかの物差しを作って示すこと、親教育をすること、新しい倫理観を育てること、売春防止法があるにもかかわらず公然と売春が行われているような「ウソ社会」を改めること、などです。

これらの討論を聞いていて、討論者はそれぞれ何がしかの一面的なこうした現象の特徴を述べてはいるのです

が、根本的なことが分かっているかと思いません。

その根本的なこととは、私の持論ですが、いま日本だけではなくて、世界中が「自己」中心的な社会になってきていることです。

そうした社会では、基本的に人を求め、人を信じ、人を尊重する風潮がなくなってきました。つまり、「他己」が働かなくなってくるのです。

それは、伝統がすたれ、慣習が無視され、規範性が薄くなり、他者の痛みや喜びを我が痛みや喜びとすることができなくなってくるということです。言い換えますと、それは、他者に愛をあげるのではなくて、他者から愛を欲しがり、他者に支持や、承認や、服従を求める、ということの意味しています。

そうなりますと、実は、人間関係がお金や物に還元されやすくなっていくのです。「他己」の中心をなす「人の心を感じるこころ」が希薄になっているのに、人から支持や服従を欲しがるということは、何らかの「自己」の欲望の満足をもたらすものをもたらなければ、それを感じることができないということだからです。物やお金をもらわないと、相手の愛や支持や承認を感じることができないということです。そして、それをもらうことを当たり前のことと感じてしまうということです。

また、人間は自己に閉じるほど、自己を他者によってではなく、自己自身の欲望の満足によって支えなければならなくなっていく。その欲望とは、自己の食欲であり、性欲であり、優越欲です。それらの欲望を代表的に満足させると考えられるのが、お金や財産であり、名誉や権力なのです。

いま、権利という「自己（エゴ）」の主張は、子どもへの「人権宣言」にまで及んでいます。それは、大人が自己に閉じて、子どもに愛を与えなくなってきた証拠だと言えますが、多くの人はそれに気付いていません。

討論会で指摘された現代の少年たちの心の傾向は、大人たちの心の反映でしかありません。討論者をも含めて自分たちが、深く反省しなければなりません。

例えば、規範性が薄くなってきたことや、人の痛みが感じられなくなってきたことは、まさしく大人がそうなっているからなのです。

前述しました、子どもを欲求不満にしない育て方ですが、確かにフロイトという心理学者が、欲求、特に性的欲求を抑えることが、人間性の自由な開放を阻害している、神経症を中心とした社会的な不適応に追いやる、と言いました。だから、そうした欲求を抑えないこと、つまり欲求不満にしないことが善いことであるとしまし

た。でも、私に言わせると、そうすることこそ、究極的には人をますます社会から疎外させることになるのです。

でも、このフロイトの主張は、いまから百年も前になされたもので、いまや世界はフリーセックス時代になり、そのふしだらさに対する警告としてエイズが流行しているのではないかとさえ思えます。ですから、この討論会で指摘されたことは今に始まったことではないのです。それよりも、この主張も近代以来の「自己」肥大化傾向の一貫としてなされたものと考えられるのです。

自己を肥大化した結果として、親は子を愛さなくなってきましたし、他者に関心を薄くし、子をしつけなくなってきたいます。しつけがだんだんとゆるくなってきたのです。人間は、自分の思いどおりにならないことを味わわさない限り、他者を感じたり、信じたりするようにはなれないのです。

ですから、この若者の心的荒廃を回復するためには、まず、大人たちが失っている「信」を取り戻さなければならぬということです。自分を超えたもの・権威を、信じ仰ぎ、それに従わなければなりません。それが信仰です。そして、子どもたちに、愛を与えて、親を信じさせ、従わさなければならぬのです。

釈尊のことば（四九）

法句経解説

（一七四）この世の中は暗黒である。ここではつきりと（ことわりを）見分ける人は少ない。網から脱れた鳥のように、天に至る人は少ない。

本誌六月号に次のような詩を載せました。

暗いところを探す

暗いところで／落としたりものを／明るいところで／探している／／己を知るとは／暗いところを／知るといふこと

この偈はなかなか難しいように思えます。「この世の中は暗黒である」というのも、普通は、暗黒は暗黒時代と言われますように、社会の秩序が乱れたり、道徳がすたれたりしているときに使うのですが、ここでの暗黒はもっと違った意味で使っていて、かなり比喩的です。

それは、私の詩のような意味に近い意味で使っていると思うのです。つまり、暗いのは人々のこの中であって、多くの人はそのことに気付いていない、それこそ

が、まさに暗黒であるということなのです。

私たち、特に現代人は、意識して、あるいは、理性ではつきり認識することが、世の中の「ことわりを見分ける」ことだと思っただけですが、そうではありません。それは、私の詩で言えば、いわば明るいところを探していることになっていくのです。

私たちは、ことわりを、暗いところで見分けなければ、見分けたことにはならないのです。なぜなら、それを、暗いところで失っているからなのです。

暗いところで失うとはどういうことなのでしょう。実は、もう何度も述べてきましたので、賢明な読者の方は、だいたいお察しがついておられると思います。それは無意識の中にあるのです。私たちは、生まれたとき無意識の生命蔵識（生きようとする力）と如来蔵識（宇宙根本の原理）とが、未分化でも統合されているのですが、成長するにつれて意識的になり、いろいろなことができようになるようになります。そうして、できることが増えれば増えるほど、私たちの如来蔵識は曇って、暗くなってしまうのです。そして、大人になったとき、それがあつたことすら全く分からなくなるのです。そして、意識して、つまり理性で、明るいところを探すようになるのです。

この無意識の如来蔵識と生命蔵識とが、修行によって

統合されるとき、網からのがれた鳥が「天に至る」ように、自分もすうつと天に至ったと実感できるのです。

(一七五) 白鳥は太陽の道を行き、神通力による者は虚空を行き、心ある人々は、悪魔とその軍勢にうち勝って世界から連れ去られる。

鳥が、太陽コンパスで渡りをするのは、今はよく知られたことです。この偈にありますように、釈尊の時代にも似た発想はあったようです。

神通力(じんずりき)による者は虚空を行く、というのですが、神通とは、中村元著『仏教語大辞典』によりますと、次のようになっていきます。すぐれた智慧、一般の人間の能力を超えた、自由自在の活動能力。不可思議で自在な威力。超自然的な不可思議の能力。超人的な能力。不可思議な超人的なはたらき。無礙自在な通力。くすしき力。

このの意味に共通しているのは、人間や自然などを「超」えている、あるいは「不可思議」であるという点です。ですから、こうした力をもつ者は、虚空を行くと言えるわけです。私も、弘法大師さまの霊をこの身体に感じることがありますが、それは、「兜率天へとそつて

ん」という天界におられるお大師さまから出た霊が、虚空を伝わって私に到来している、あるいはその逆であることを意味しています。

最後の「心ある人々は、悪魔とその軍勢にうち勝って世界から連れ去られる。」という部分ですが、なかなか分かりにくいかも知れませんが。

釈尊もそうでしたが、解脱を前にして、悪魔が現れ、誘惑しますが、釈尊はそれにうち克たれ、解脱に至られました。解脱に至ることを、ここでは、「世界から連れ去られる」と表現しています。

人間は易きに流れ安いものです。成人病を予防するためには、高カロリーのお食事をしたり、お酒を度を超えて飲んだり、あるいはそれによって体重を増加させたりすることは、誰でもよくないと知っていますが、なかなか守れません。ついつい、美味しいものがありますと、悪魔の誘惑にのってしまいます。また、墮落だと分かっているのに、酒やセックスやギャンブルという悪魔が現れますと、その軍門に下ってしまうのです。また、ヨーガを続けることが安心立命には欠かせないと言われても、怠け心という悪魔が現れて、継続することを妨げてしまいます。でも、心ある人々は、それを乗り越えて、悪魔とその軍勢にうち勝ち、世間を超越するのです。

後記

- 一、きびしい残暑が続いています。
- 二、この讃岐では雨が永い間降らず、日照りが続いています。どのため池も、水が少なくなり、また、畑ものは、水やりが欠かせなくなっています。軽トラに大きな水槽を二個積んで、サトウキビに水をやっている方もあります。サトウキビは、美味しい讃岐和三盆を作る材料です。
- 三、私がお借りしている畑のそばの池は、ついに干上がりました。その池にかかっている地主さんの田は、土が白くなってひび割れています。これ以上日照りが続きますと、穂が出るかどうか危ぶまれます。
- 四、私は、講演はできるだけお断りしたいと思っているのですが、声をかけて下さった方が、本誌の読者ということで、今年の三月二十九日に、徳島県北島町で「心の健康について」という題で講演をさせて頂きました。
- 五、その時、話を聞いた方が、とても良かったと推薦して下さいだったので、是非うちの町でもと、同じ題での講演依頼がありました。その町は、徳島県神山町です。断りきれず、七月二六日に行ってきました。
- 六、どちらの会場でも、みなさんがとても熱心に聞いて下さいました。ありがとうございました。
- 七、『聖書』解説で、私の時間論の一端を述べましたが、

分かりにくかったでしょうか。また、最後の部分も多分、難しかったのではないかと思います。

八、どちらにも、今までに誰のあたまの中にも無かったと思われる考え方です。分かりにくくて当たり前と言えます。何度も何度も読み返してみたいと思います。きつと得るものがあると思います。

九、いま、大学は夏休みですが、論文の締切りが九月はじめと九月末とに二つ控えていて、とても忙しくしています。なお、先日、眼科医向けの『あたらしい眼科』という雑誌に、「まなざしの人間精神学」と題して、原稿用紙二十枚ほどの論文を書きました。

月刊 こころのとも 第七巻 八月号 (通巻 八十号)	平成八年八月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしなり</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	